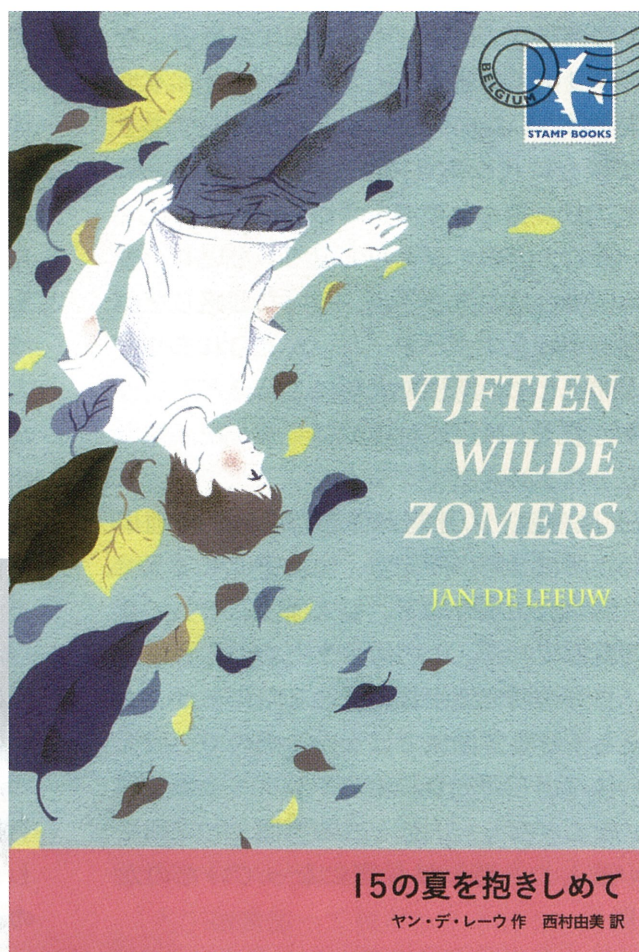


閲覧 ニュース 115号

2014.10



フランダースの声

現代ベルギー小説アンソロジー

フランダースセンター (編)

アンネリース・ヴェルベーク 訳=井内千紗	Annelies Verbeke / Chisa Inouchi
アンネ・プロヴォースト 訳=板屋嘉代子	Anne Provoost / Kayoko Itaya
ヒュー・ホ・クラウス 訳=三田順	Hugo Claus / Jun Mita
トム・ラノワ 訳=鈴木良子	Tom Lanoye / Tamiko Suzuki
クリストフ・ヴェークマン 訳=鈴木義孝	Christophe Vekeman / Yoshitaka Suzuki

松籟社

「教養図書館」

西 垣 昭

私は一般教育部健康科学単位に所属しておりますが、読む本といえば、やはり自分の専門であるスポーツ・健康に関する本が多くなります。そして専門種目であるスキーに関する歴史、教本、マテリアルの雑誌などです。たくさん本を読む人とは言い難いです。また、図書館で本を借りて読む時代から、「Amazon」で書籍を購入でき、タブレットで本を読める便利な時代ですが、そこまでのデジタル人間でもないし、読むならば本自体の重さ、色、匂いなど感じながら読む方が好きです。オーバーかもしれませんが、人間としての感性を大切にしたいと思っています。若干、時代に付いて行くのが精一杯なのかもしれません。

「教養図書館」の建物ができた頃によく利用していた所は3階の研修室、記念室、ゼミ室で、授業、懇話会の集合場所、個人面談、そして教職員閲覧室でした。その頃はまだ古い体育館ですが、自分の研究室が体育館の2階にあり、あまり落ち着ける雰囲気ではなかったので、研究室から抜け出し研究資料集めやレポートの整理など、なんとなく一人になれる空間として利用していました。時々には昼寝になっていたのかも……。

この様な私からでは説得力がありませんが、教養図書館の良いところは、やはり色々な書物があるということです。つまり、学部の図書館はどうしても専門書が多くなり、そこに来る人はその事だけを調べに来る人達が多くなると思います。教養図書館は専門的な事を調べに来ても、少し息抜きとして違う書物を目にすることができる、感性を豊かに広げられる場ではないでしょうか。

少し予先が変わりますが、小学校は「児童」、中学・高校は「生徒」と呼ばれていましたが、

大学では「学生」と言います。「児童」「生徒」から「学生」へ、その違いはどこにあるのでしょうか？それは、これまでと比べ自主的に学ぶと言うことが重要視されることです。また、発育・発達の最終段階（完成期）でもあります。自主性がもとめられるのは、学習面ばかりではありません。少し心の余裕を持ちながら、学生生活の全ての場面で、自分の力で物事をやっていく自立性や、自分自身をコントロールする自律性を養い「指示待ち人間」にならないように心掛けて頂きたいです。そんな時期でもあるので、人間の幅を作る場として教養図書館に行ってください。L1号館の階段の踊り場などに書物の紹介があったり、図書館職員の方々の非常に細かなサービスが行われていますし、学生ホールの横にあることも立ち寄りやすい施設だと思います。私個人としては、教養図書館が建て替えられることがあるなら、全学部の学生が通る場所にあり、学生ホールの上に図書館があればいいのかなと思っています。

最後に、誰しもが「健康」という文字に興味を持ち、色々な書物を目にしていると思いますし、これに「スポーツ」と言う文字が入ればその倍以上の数になるでしょう。この時代、健康で豊かな心で生き抜く為に、是非、教養図書館とも並行して、トレーニングルームでペダルをこぎながら読書もして頂きたいと思います。

今年度で定年退職となりますが、法人全ての方々に、この場をお借りしまして、お世話になりましたことを深く御礼申し上げます。そして、いつまでも可愛い「教養図書館」が北里のシンボルとして残っていることを願っています。

（人間科学教育センター・健康科学）

大学図書館って何だろう？

前 田 崇

夏休みのある日、教養図書館からエッセイ執筆の依頼があった。図書、図書館に関するものなら何でもよく、「自由」とのこと。さて、何を書こうか……。そもそも大学図書館って何だろう？と考えてみるが、すぐには答えが浮かばない。しかし、もし大学に図書館がなかったら？と想像してみると、大学の魅力が半減してしまうように感じる。

学生時代、教室よりも図書館にいる時間のほうがずっと長かった（ときどき居酒屋や雀荘にいたこともあったが……）。もちろん研究や勉強のために図書館を利用していたが、それとは別にあてもなく色々な本を自由に読むことが楽しかった。図書館は教室と違って「自由」だ。そこには「指導」も「教育」もない。いつでも自分の好きな時に行くことができ、好きな本や雑誌を好きなだけ読むことができる。また、学生の自主的な研究会や読書会、調査の打ち合わせや議論の場になったのも図書館だった。

教員になってからは、図書館は自分の研究や勉強のためだけでなく、授業を組み立てるために、なくてはならないものになった。前任校の千葉大学では、授業と図書館が密接に結びついていて、学生の主体的な学習を促進する仕掛けがあった。図書館の一角に「授業資料ナビゲーター」（授業ナビ）と題されたコーナーが設置されており、授業で学ぶ内容について基本的な知識が得られる文献や、教員が授業で言及した文献などが配架されていた。

こうした取り組みは雑誌の大学特集でも紹介されたが（『週刊ダイヤモンド 2012年 9/29号』）、教育社会学者の荻谷剛彦によれば、アメリカの大学には、かなり前から類似した仕組みがある。「文献は、図書館の“リザーブルーム”で、学期中“リザーブ”しておく。こうしておくと、その文献については館外貸出

禁止になり、館内でも時間を限った貸出になる。そうすることで授業で使う文献を学生がいつでも参照できる体制を整えておくのだ」（荻谷剛彦『グローバル化時代の大学論 1』中公新書ラクレ 2012年）。千葉大学図書館では、図書館の授業ナビのコーナーに同じ文献が2冊（貸出用とリザーブ用）配架されていたが、これはアメリカの大学のやり方を発展的に実践したものと言えるだろう。

さて、ここまで自分と大学図書館の関わりを振り返ってきた。こうした具体的な経験を抽象化して考えるために、社会学における社会システム論と社会学者の吉見俊哉の大学論を援用しよう。社会システム論は社会をシステム（相互に関連し合う要素の集合からなる全体）として捉える。大学も一つのシステムであると考えれば、大学図書館は大学というシステムを構成する主要な要素ということになる。

また、吉見の大学論によれば、大学とはメディアであり、メディアとしての大学は、人と人、人と知識の出会いを持続的に媒介する。そして、その媒介の基本原理は「自由」にあるという（吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書 2011年）。

「大学図書館って何だろう？」という問いに対して、ひとまず、次のように答えることができるだろう。大学図書館は、メディアとしての大学システムの主要な構成要素であり、人と人、人と知を媒介するために、大きな役割を果たす。そして、その媒介の基本原理は「自由」にある。

本学においても、学生や教職員は教養図書館というメディアを通じて様々な知識に自由に出会うことができる。この短いエッセイがあなたと教養図書館を結びつけるメディアになると嬉しい。

（人間科学教育センター・人文社会科学）
エッセイで紹介された図書は図書館で所蔵しています。

「ノーベル文学賞、オランダ語の文学、そして日本」

三 田 順

今年もノーベル賞の季節がやってきました。ノーベル賞には様々な部門がありますが、よく知られているものに文学賞があります。近年は日本の作家、村上春樹が毎年のように候補に挙がっていると噂されていることもあり、特にメディアの注目が集まっているようです。「噂されている」と書きましたが、ノーベル賞の選考過程や、候補者については五〇年間の守秘義務があるため、実のところ毎年本当に村上春樹が候補者に入っているのかは分かりません。実際、毎年発表される受賞者は、確実視されていた作家よりも、若干意外な作家が多いようです。

ノーベル賞の授賞者が発表されると、各メディアが授賞者についての紹介記事をすぐに用意します。新聞であれば翌日の朝刊に載せることになりますが、ノーベル文学賞が発表されるスウェーデンとは八時間の時差があるため、発表と同時に新聞を印刷に回さねばなりません。受賞者が発表されてから記事を書いていたのでは当然間に合わないの、事前に記事を手配することになります。とはいえ先に述べたように、ノーベル賞の候補者は事前には公表されていません。そこで担当者がどうするのかというと、国際的なブックメーカー（賭け屋）のウェブサイトで候補に挙げられている作家（三十名程）全てについて、事前に文学研究者等に受賞記事を依頼するのです。日本語にすでに翻訳され、よく知られている作家であれば執筆者を見つけるのは難しくありませんが、まだ翻訳がなく、かつ作家の執筆している言語に通じている人が少ないとなると大変なことのようです。私の研究対象の一つであるオランダ語文学も日本ではまだ研究者がほとんどおらず、去年は突然

ある大手新聞社から、ノーベル文学賞発表の二日前に受賞記事の執筆依頼がやってきました。対象となったのは名前しか知らない詩人だったので、大慌てで調査をし、記事を準備することになりました。最終的に彼は受賞を逃し、準備した原稿はお蔵入りとなりましたが、ネットで生中継された受賞者発表を見守るのは中々に新鮮な体験でした。

ところで、オランダ語で執筆した作家でノーベル文学賞を受賞した人はまだいません。かなり近いところにいたと言われる作家がベルギーとオランダにそれぞれ一人ずついるのですが、二人とも受賞を待たず世を去ってしまいました（ノーベル賞は存命中の作家にのみ受賞資格があります）。蘭学の伝統を有する日本とオランダ語の関係は歴史的に密であるはずなのですが、残念なことに日本語に翻訳されたオランダ語の文学はまだ非常に少ないのが実情です。ノーベル文学賞を受賞した作家の作品は日本ですぐに翻訳されますから、早く誰かが受賞し、オランダ語文学の翻訳が活気づいて欲しいと願っています。表紙に載せた二冊の本は、最近翻訳されたばかりの、ベルギーで書かれたオランダ語の小説です。因みに、『フランダースの声』に収録されている、私が翻訳を担当した「茂みの中の家」の著者ヒューホ・クラウス（Hugo Claus, 1929-2008）は、ノーベル文学賞に最も近いと言われたオランダ語作家です。事故で亡くなった主人公の少年の視点から語られる青春小説、『15の夏を抱きしめて』（ヤン・デ・レーウ作）と共に教養図書館に配架されています。

（人間科学教育センター・人文社会科学）
エッセイで紹介された図書は図書館で所蔵しています。

閲覧ニュース115号 2014.10 発行

発行責任者 平 井 清 子

北里大学教養図書館

〒252-0373 相模原市南区北里 1-15-1

電話 (042) 778-8005